

令和3年度 施設実習

保育所実習担当 谷川 友美・米持 博美・伊藤 昭博・大元 千種・
木戸 貴弘・菅原 航平・中山 正剛・
山本 裕一（令和2年度）・助安 明美（令和3年度）

令和3年の施設実習は、保育実習Ⅰ（施設）を8月下旬と9月上旬の2期に分けて、県内の66か所の施設にて実施した。

実習に向けて2年間実習指導を行った。1年次及び2年次前期では、保育実習Ⅰ（施設）の事前指導として、実習の意義・目的・内容の理解、施設等の理解、対象者の理解、文書作成時の注意点、指導案・日誌の書き方などについて指導した。2年次後期は保育実習Ⅰ（施設）の事後指導としての振り返りを行った。また、1・2年合同授業にて2年生が1年生を指導する機会を持った。これらを通して、改めて実習の意味を実感し、保育者となることへの自覚を促すことができたと考える。

また、COVID-19感染予防対策として、体調の記録のほかに、アルバイトや不特定多数の人が集まる行事への参加は実習2週間前から禁止し、実習においては実習初日の朝に抗原検査を全員が実施するなどの対策を行った。66箇所の施設のうち、実習の受け入れが難しい施設は21施設であった。21施設に実習に行く予定をしていた学生は60名いた。60名のうち、他施設へ再依頼し施設での実習が可能となった学生は、18名おり、32名の学生は学内で実習を設定し行った（学内実習への切り替え）。

1. 実習先 保育実習Ⅰ（施設）・・・66施設 学生数 176名

内：コロナウイルス感染所の影響で実習できなかった施設21施設 学生数32名

2. 実習期間 保育実習Ⅰ（施設）

1期・・・令和3年8月17日~30日

2期・・・令和3年9月3日~9月16日

3. 施設実習の意義・目的

- 1) 実習施設の特徴の理解
- 2) 施設の一般的な理解
- 3) 施設に入っている子ども・障がい者の理解
- 4) 保育士の職務内容と役割の理解
- 5) 養護技術についての理解と技術習得
- 6) 実習日誌を書くことを通じて記録の取り方の習得

4. 施設実習の様子

○COVID-19対策として体調に不調がある場合は必ず休むように指導したが、体調管理を徹底したため、例年よりも欠席が少なくなっていた。

○学生は、様々な年代の子どもたちや障がい者らとの関わりを通して、年齢による発達の違いを目の当たりにし、発達過程の理解と発達に応じた保育の必要性を実感している。

5. 2年間を振り返って

2年間にわたる実習指導を通して見えてくる学生の変容から、実習体験の影響力と実習後の振り返りの意義を痛感している。学生の保育職へのモチベーションや保育の質をさらに高めるため、指導体制の改善に努めるとともに、実習施設と養成校との協同体制の強化にも努めていきたい。COVID-19の影響で学内実習に切り替えることを余儀なくされた。急遽、実習先の先生方に依頼し、現場で行われている現状や子どもや施設の理解が深まる講話をお願いすることとなった。快諾いただいた先生方にはこの場を借りて、心より感謝を申し上げたい。

『施設実習を終えて』



初等教育科2年 Cクラス 菊池 真奈

今回の施設実習を通し、障害のある方と関わる上で大切なことを深く学ぶことができました。今回私は、重度障害者施設で実習をさせていただきました。多くの学びがありましたが、その中でも特に印象強く残ったことは大きく分けて二つあります。

まず一つ目は、利用者の気持ちに寄り添い、特徴を理解しながらコミュニケーションをとることの大切さです。利用者さんは、言葉にして何かを伝えることが難しいために奇声を上げたり、時には私たちの不本意な方法でかわりを求めたりしておられました。驚くこともありましたが、どのような状況でも職員の方々が利用者さんの気持ちに寄り添いながら、落ち着いて優しく対応している姿を見て、一人ひとりの特徴を理解することがこの職業の大事なポイントだと学びました。また、職員の方々は利用者さんとコミュニケーションをとるときに必ず目を見ておられました。言葉が通じなくても、目を見て話をしたり、手を握ってコミュニケーションをとったりすることで利用者さんの気持ちを落ち着かせることができると同時に、利用者さんとの信頼関係にもつながっているということも学ぶことができました。言葉以外のコミュニケーションは思っていたよりも難しく、利用者さんの気持ちを理解したり自分の思いを伝えたりすることに苦戦することもありました。しかし、特徴を理解し、利用者さんとのかわりが増えていくごとに気持ちが通じ合うことも増え、日々障害のある方と関わることの楽しさや嬉しさを実感することができました。この感情はこの職業だからこそ味わえるものであり、その部分もこの職業の魅力だと強く感じました。

二つ目は、職員の方々の雰囲気と環境のつく

り方です。利用者さんの表情や行動に注目してみると笑顔で過ごす方がほとんどでした。実習を通して利用者さんの笑顔が多い理由は、職員の方々にあると気づきました。職員の方々はいつも笑顔で利用者さんと関わり、時には冗談を言って利用者さんを笑わせたり、利用者さんの要望をできるだけ叶えられるよう環境を整えたり、行事等に全力を尽くしたりと、常に明るく一生懸命に過ごされていました。また、職員同士でも笑顔で話をしたり、利用者さんの様子を共有しながら笑顔で見守ったりと毎日園全体が優しい雰囲気です。利用者さんと職員だけの関係を大事にするのではなく、職員同士の関係も充実させながら、信頼関係を築いている職員の方々の姿は利用者さんの心を落ち着かせているように感じました。そのような姿が利用者さんの笑顔の秘訣だと気づき、職員の方々に対する尊敬の気持ちが大きくなりました。

今までの自分は、正直、障害と聞くとマイナスなイメージばかりで、他人事のように考えてしまっていました。しかし、施設実習をさせていただいたことで、障害に対する考え方を変えることができたと同時に、この職業に対する興味が湧き、大きな魅力を感じました。最初は、予想外の出来事が多く、戸惑うこともありましたが、一緒に過ごさせていただくうちに、もっと笑顔にしたいという気持ちが大きくなっていき、気づけば毎日楽しく利用者さんと関わっていました。障害に対する考え方は人それぞれだと思います。様々な考え方や感じ方があると思いますが、この実習で自分の中の障害に対するマイナスな考えはなくなりました。この経験は、自分の考えを変えるきっかけとなり、自分自身を大きく成長させることができた、かけがえのない貴重なものとなりました。この学びを大事にし、これからの繋げ、活かしていきたいと思っています。

『コミュニケーション方法について』

初等教育科2年 Cクラス 久保友香理

私は、障害者支援施設の実習に参加をしました。利用者さんのほとんどは、言葉でのコミュニケーションを取ることが難しく、初めは、関わり方に戸惑ってしまうことが多くありました。私が利用者さんに話しかけても、利用者さんからの返事はなく、どうしたらよいか全く分からず、自分からコミュニケーションを取ることができていませんでした。車椅子を利用している利用者さんと散歩に出かけた際、支援者の方から、利用者さんとコミュニケーションを取りながら、散歩をするように言われました。「〇〇さんお外気持ちいいですね。」「今日は天気がいいですね。」などと言葉掛けをしても、利用者さんからの返事はありません。私は、支援者の方に、「利用者さんとのコミュニケーションの取り方が分からない」と質問をさせて頂きました。すると、「コミュニケーションの取り方は人それぞれであり、言葉で話すことだけではない。」と教えて頂きました。加えて、「反応が無いように見えても、表情が変化していることもあり、利用者さんの小さな変化に気付くことが大切である。また、毎日の関わりの積み重ねが重要である。」と助言を頂くことが出来ました。その助言を受け、私は、毎日、出勤をした際に、「おはようございます。」と全ての利用者さんに朝の挨拶をすることから始めました。実習の始めは私から話しかけないと、コミュニケーションを取ることが出来ない利用者さんもいましたが、利用者さんの方から「おはよう。今日もよろしくね。」と声をかけてくれるようになり、とても嬉しく思いました。そして、毎日の関わりの積み重ねが、利用者さんとの信頼関係の構築に繋がり、大切な支援の1つであることを実感することが出来ました。

また、今回の施設実習を通して、手遊び歌は子どもたちだけが楽しんでもくれるのではなく、幅広い人が楽しんでもくれるということも学ぶことが出来ました。手遊び歌を通して、利用者さんとコミュニケーションを取るきっかけにもなりました。特に楽しんでもくれた手遊び歌は、「とんとんとんひげじいさん」「おべんとうぼこ」「ミックスジュース」です。I期の実習生が、「とんとんとんひげじいさん」の手遊び歌をしていたこともあり、とても気に入っていて、私たちを見て、「とんとん」というほど気に入ってくれており、とても嬉しかったです。

さらに、身振り手振りを使うこともコミュニケーションを取る上では必要なことであると学ぶことが出来ました。言葉を話すことが難しい利用者さんでも、「おはようございます。」と言葉掛けをしながら、手を振ると、利用者さんも手を振り返してくれ、コミュニケーションを取ることが出来ました。

今回の施設実習を通して、コミュニケーション方法についての考えを改めることが出来ました。言葉だけがコミュニケーション方法ではなく、手遊びをしたり、表情を見たり、身振り手振りを使ったりなど、利用者さん一人一人に関わり方に違いがあることを実感することが出来ました。利用者さん一人一人を理解し、その人に合った関わり方を探すことに初めは戸惑ってしまいましたが、毎日、少しでもよいので全ての利用者さんと関わることを意識し、私を信頼してもらうことに力を入れて過ごしました。そのことを通して、利用者さんから声を掛けて下さったり、いつもとは違う表情を見せて下さったりして、やりがいを感じる事が出来ました。子どもたちと関わる上でも、施設実習で学んだことはとても役に立つと思います。その子どもや保護者に合ったコミュニケーション方法を探し、信頼関係を築くことが出来たらいいなと思っています。

『コミュニケーション方法について』

初等教育科2年 Cクラス 久保友香理

私は、障害者支援施設の実習に参加をしました。利用者さんのほとんどは、言葉でのコミュニケーションを取ることが難しく、初めは、関わり方に戸惑ってしまうことが多くありました。私が利用者さんに話しかけても、利用者さんからの返事はなく、どうしたらよいか全く分からず、自分からコミュニケーションを取ることができていませんでした。車椅子を利用している利用者さんと散歩に出かけた際、支援者の方から、利用者さんとコミュニケーションを取りながら、散歩をするように言われました。「〇〇さんお外気持ちいいですね。」「今日は天気がいいですね。」などと言葉掛けをしても、利用者さんからの返事はありません。私は、支援者の方に、「利用者さんとのコミュニケーションの取り方が分からない」と質問をさせて頂きました。すると、「コミュニケーションの取り方は人それぞれであり、言葉で話すことだけではない。」と教えて頂きました。加えて、「反応が無いように見えても、表情が変化していることもあり、利用者さんの小さな変化に気付くことが大切である。また、毎日の関わりの積み重ねが重要である。」と助言を頂くことが出来ました。その助言を受け、私は、毎日、出勤をした際に、「おはようございます。」と全ての利用者さんに朝の挨拶をすることから始めました。実習の始めは私から話しかけないと、コミュニケーションを取ることが出来ない利用者さんもいましたが、利用者さんの方から「おはよう。今日もよろしくね。」と声をかけてくれるようになり、とても嬉しく思いました。そして、毎日の関わりの積み重ねが、利用者さんとの信頼関係の構築に繋がり、大切な支援の1つであることを実感することが出来ました。

また、今回の施設実習を通して、手遊び歌は子どもたちだけが楽しんでもくれるのではなく、幅広い人が楽しんでもくれるということも学ぶことが出来ました。手遊び歌を通して、利用者さんとコミュニケーションを取るきっかけにもなりました。特に楽しんでもくれた手遊び歌は、「とんとんとんひげじいさん」「おべんとうぼこ」「ミックスジュース」です。I期の実習生が、「とんとんとんひげじいさん」の手遊び歌をしていたこともあり、とても気に入っていて、私たちを見て、「とんとん」というほど気に入ってくれており、とても嬉しかったです。

さらに、身振り手振りを使うこともコミュニケーションを取る上では必要なことであると学ぶことが出来ました。言葉を話すことが難しい利用者さんでも、「おはようございます。」と言葉掛けをしながら、手を振ると、利用者さんも手を振り返してくれ、コミュニケーションを取ることが出来ました。

今回の施設実習を通して、コミュニケーション方法についての考えを改めることが出来ました。言葉だけがコミュニケーション方法ではなく、手遊びをしたり、表情を見たり、身振り手振りを使ったりなど、利用者さん一人一人に関わり方に違いがあることを実感することが出来ました。利用者さん一人一人を理解し、その人に合った関わり方を探すことに初めは戸惑ってしまいましたが、毎日、少しでもよいので全ての利用者さんと関わることを意識し、私を信頼してもらうことに力を入れて過ごしました。そのことを通して、利用者さんから声を掛けて下さったり、いつもとは違う表情を見せて下さったりして、やりがいを感じる事が出来ました。子どもたちと関わる上でも、施設実習で学んだことはとても役に立つと思います。その子どもや保護者に合ったコミュニケーション方法を探し、信頼関係を築くことが出来たらいいなと思っています。

『児童発達支援の利用者』

初等教育科2年 Dクラス 徳丸 咲良

私が実習に行った施設は、児童発達支援が必要な利用者を対象としていました。今回の実習で初めて施設と関わりました。朝からお昼過ぎまでは保育園や幼稚園と並行して通っている利用者でした。施設の保育者からどのような子どもが通っているのか聞いてみると「保育園や幼稚園で周りの子どもと同じことをするのが苦手で、簡単に言うといつものように先生に怒られてしまう子が自由の場所で思いっきりストレスを発散できるようにしているのがこの施設だよ」と教えていただきました。私は、それを聞いて施設実習の前に行った保育実習を思い出しました。クラスの友達と違うことをしたり保育者が「今からこれしてね」と言うことに対して強く反抗したりする子どもがいたことを思い出しました。私はそれを聞くまで正直そのような子どもは、保育者やほかの友達の注目を浴びたくてやっているのかなと思っていました。でも施設の利用者の話を聞いて、集団行動が苦手な子どもやストレスになってしまう子どもが中にはいるんだなと気づきました。そのため、施設の保育者だけではなく保育園・幼稚園の保育者もそれを理解したうえで対応の仕方であったり、その子どもにもあった声掛けをしたりすべきだと思いました。

施設実習は、10日間でした。最初の3日間は職員の数が多いのもあって自分が何をすべきなのかどのような行動をとらないといけないのかが全く分からずその場で立ち尽くす時間が長かったです。自分でも動かなきゃ・なにか声をかけなきゃと思っていたけど、私がいちばん近づきすぎて子どもがパニックになったり、怖がったらどうしようと思うとなかなか動くことができませんでした。しかし、施設の方が「あの子

どもは、人懐っこいから話しかけてみて」や「あの子は今日気分がよさそうではないからあまり行かなくていいよ」

など教えていただきました。また、「あの子はこのような特徴があるの」というアドバイスやそれぞれの好きなこと・得意なことだけではなく苦手なことや「このようなことをされるといやな顔をするの」と助言をいただいたおかげで少しずつではありますが子どもとのかかわり方に慣れてきました。慣れていく中で、子どもとたくさんコミュニケーションをとったり保育者の方の動きをしっかりと観察する余裕ができました。その中で、「子どもの言葉を代弁する」という大切さを一番学びました。私が行った施設の利用者は、自分の考えや思っていることが自分の言葉で伝えるのが難しい子どもが多くいました。そこで、保育者はそれをくみ取って「今お友達はそのおもちゃが欲しいんだって、貸してほしいな～」など代弁してあげることで子ども同士のつながりができると知りました。

それでも子どもの気持ちを汲み取るということは簡単ではありませんでした。突然泣き出してしまう子どもがいたときに「どうしたの?」と聞いてもなかなか答えてくれませんでした。私がどうしたらいいか分からず困っていると保育者の方は「大丈夫だよ」と理由を聞くのではなく安心させるような声掛けをしていました。そこで「気持ちを汲み取る」というのは考えていることを探るだけではなく保育者がわからない理由でも安心できるような声掛けをするだけで子ども自身は気持ちが落ち着いたり保育者と信頼感を生むことができるということを学びました。

初めての施設だったため初めて学んだ点もたくさんありました。施設だけでなく保育園や幼稚園で保育者という立場に立った時に生かしていきたいです。

『思いやりのある気持ち』

初等教育科2年 Dクラス 永野 夏帆

私はコロナ禍で施設実習が出来ずに学内実習をしました。学内実習では、色々な施設の方々が来て下さり施設の特徴やどのような方針で施設を運営しているのか、また利用者の特徴、そして利用者の支援の仕方など様々な種別、様々な事例などを学ぶことが出来ました。コロナ禍という中で実習に行けない分、色々な話を聞くことで様々な事をお聞きし、グループでその種別の特徴や事例での気づきなど話し合うことでさらに学びが深くなりました。グループで話し合うことで自分が気付けなかった部分もわかったし、自分とは異なる意見も聞くことが出来ました。

その中で、施設に共通していることがありました。それは、職員の方の思いやりの気持ちです。重度の障害を持っている方はコミュニケーションの方法で言葉が少なくても、身振り・手振り、文字や絵にして表わして気持ちを伝えているそうです。そして、それを毎日やり取りしていると、ちゃんとコミュニケーションがとれるそうです。また、子どもの施設でも、職員の方と子どもが話をすることでケアが出来たり、安心に繋がったりすることも学びました。職員の方はそれを聞いたり見たりすることでその人がどんな気持ちなのか、今何がしたいのか思いやりの気持ちで読み取っているようでした。

学内で話をしていただいた人の話の中では子どもでも大人でも、障害を持っている、いないでも、そこには愛情を持って育てている家族がいることも共通して話をしていました。

障害を持っている親には普通の子どもと比べてかなり不安がありながら育児を行っていると思います。特に小さな子どもだと、障害を持っていることに早期発見をして行かないといけな

いと思いました。私が保育者になった際にも何かしらの障害を持った子どもと関わる事があると思います。障害を持った子どもにはその子どもがどうやったら園で楽しく過ごせるのか、どうやったら友達と関わりを増やしていけるのかを考えないといけません。例えば、遊ぶ時にはルールを簡単にすることや、わかりやすいようにイラストを保育室に貼っておく事などの援助があると思います。障害を持っている子どもと子ども達がどうやって関わりを増やして行けるのか、保育者にも求められると思います。私は、子ども達みんなが思いやりのある子どもになれるように、少しずつ説明をしていきながら子どもたちの関わりを増やしていきたいです。

また、障害がある子どもの保護者は育児にとっても不安を抱えていると思うので、クラスだよりや保護者同士で話し合いができる場所を作るなど保護者が安心して相談ができる場所作りも大切だと思いました。実際に障害のある子どもや大人の方も不安なことは沢山あると思います。その中でもっと生活しやすい場所を作ることも保育者には求められているのかなと感じました。

実習を通して、職員の方や障害を持っている子ども、大人の方との関わり方、そして保護者との関係を学ぶことが出来ました。色々な話を聞いてる中で、悩んでいることは家族の方以外にも1番本人が生きている上で悩んでいることは忘れてはいけないと感じることが出来ました。保育者や保護者の間でもしっかりと援助の方法を伝えたり、一緒に悩んでいくことも大切だと思いました。

これからも思いやりの気持ちを持ち、思いやりのある人間関係をつくっていくために、このような学びを活かしていきたいです。

『保護所と保育所の関連性』

初等教育科2年 Dクラス 羽田野芽依

私は児童相談所の一時保護所で実習をさせていただきました。一時保護所は被虐待児を始め、非行、不登校、発達障害等様々な事情や課題を抱えた児童が生活を送っています。実習では決められたスケジュール通りに生活する子どもたちの援助をしながら一緒に過ごしました。その中で私が特に苦勞したことは虐待を受け、入所してきた子どもの理解と対応です。

まず私が気になった子どもは性的虐待を受けた小学校低学年の女児でした。年齢の割に口数が少なく、あまり周りの物事に興味を示さない子どもでした。私は保育者を目指しているので遊びを通して子どもとの信頼関係を築いていくことに努めました。初めはほそほそと独り言を呟くことが多かった子どもでしたが、関わる時間が増えるにつれ、私に話しかけてくるようになりました。虐待を受けたとしてもまだまだ甘えたい盛りの子どもの、遊びの時間に「はやくおうちにかえりたいなあ。」と独り言のように言う姿を見て、自分がどれだけ恵まれた環境で育ってきたかが分かりました。

また上の例とは反対に「おうちにかえりたくない。」と言う未就学男児と小学校低学年女児もいました。この姉弟はネグレクトを受けており、保護所の生活が楽しくて仕方がないという様子でした。保育所等にも通っていないようで、自分の欲求が通らなければ「なんで？私もしたい。」と我慢できない姿が多く見られました。一時保護所は集団生活の場なので皆が気持ちよく過ごせるような環境を作るためには教育が必要です。ここで改めて幼児期の教育や保育の重要性を感じました。信頼関係の土台を作ったうえで、試行錯誤しながら諦めずに思いを伝え続けることで、時間がかかっても子どもも変わる

ことができると思います。この姉弟の場合は家庭で教育を受けていなかったため、無理に自分の欲求を通そうとする姿がありましたが、家庭の環境が整い帰宅する場合も、里親のもとへ行く場合も、同じことが繰り返されないよう教育という面からも支援していく必要があることを学びました。

このように様々なタイプの子どもの入所理由を知ったうえで支援するため、これまでの保育とは異なる難しさがありました。なるべく子どもの気持ちには寄り添いたいですが、寄り添いすぎると依存関係になってしまったり、早く帰宅したいという思いが強くなったりするため、子どもと実習生という関係を忘れず関わるのが大切だと感じました。

私は施設実習を通して、困っている子どもの支えになりたいという気持ちが芽生え、福祉の分野にも興味を持ちました。就職は保育職に決まりましたが、様々な事情を抱える子どもも遊びを通して関わり続けることで信頼関係を築くことができるという学びは保育の中にも生きてくると思います。また、保護所の職員の方々がスポーツを子どもと一緒に心から楽しんでいる姿が印象に残っています。保護所の子どもも普段から一緒に楽しく遊んでくれる職員のもとで過ごしていたので、保育所でも子どもたちが楽しく安心できるような空間づくりに努めていきたいです。